



盛夏の頃、皆様方におかれましては益々ご健勝の事と存じ上げます。例年になく猛暑日が続き夕立等の湿り気が欲しい日々が続いています、体調管理の難しい日常ですが皆様方御健康に留意ください  
今号はカンボジアにおける養成プロジェクトについて尽力されている皆様方による寄稿をお届けいたします。

**July 2012 Global Mental Health in Cambodia**

SUMHに参加して

岡 一朗

SUMH理事長 青木 勉

カンボジア映画上映会を終えて

編集後記

SUMH理事 篠原 慶朗

発行: 途上国の精神保健を支えるネットワーク

PSRスタッフ養成に向けて

Supporters for Mental Health; SUMH

～カンボジア精神保健史を振り返る～

\*\*\*\*\*

SUMH監事 高橋 智美

\*\*\*\*\*

Global Mental Health in Cambodia  
青木 勉

2012年7月12日朝10時から、Siem Reap 州病院メンタルヘルスリハビリテーションセンターで、SUMHカンボジア代表 Pisal さん、州病院精神科の Sovannara 先生、新たに7月にSUMHカンボジアに就職したPSRアシスタントの Vibol さん、そして看護師の Savry さん、長男の桃太郎、そして次男の光太郎とミーティング。ハードウェアとソフトウェアについて要望が出た。ハードウェアは、リハビリテーションセンターが手狭になってきたので、拡張してほしいとの事。見学者も他の地域から年4回ほど来るし、すでに周りには、他のNPOからの支援で建物が隣接しているため、もし大きくするならば、他の用地を探さねばならない。以前より、希望のあったパソコンの新機種を購入したいとのこと。先月購入した新型のコンピュータの他、ブラウン管のデスクトップがあったが、もう修理もきかないとのことで、インク代が高くてランニングコストがかさむプリンターとともに、新規購入を勧めた。ソフトウェアについては、シエムリアップ州内の Kralank 保健区病院からも Angkor Chum 保健区病院と同様、

精神科外来サービスをしてほしいとの要望が有り、今後検討すると返答した。

Angkor Chum 保健区病院の精神科医外来も1回平均50人の診察であるが、「先月は80人まで増えてしまって、ふらふらになった」と、Sovannara 先生と Pisal さんの言葉。需要に供給が全く追いつかない、自らの精神科外来診療を彷彿とさせる話であった。また、州保健局から、新たに、以前行なったメンタルヘルスセンタースタッフトレーニングの要望が有るとのこと。スタッフの異動や、1クールのみでその後のメンテナンスの講習がなかったため、追加の要望が有ると。これも、今後の検討課題と伝えた。

Angkor Chum プロジェクトの現地化について、相談してみた。Angkor Chum では、国のプロジェクトとして、保険制度が試行されており、患者さんは、保険が有る場合、1回の診察で\$1.5が保険会社から支払われ、ない場合は患者本人が\$0.75を支払っている。その割合は分からないという。その収入の内の一部をSUMHCに支払ってもらう事は出来ないかと尋ねると、病院が精神科診療で必要な薬を購入し

2012（平成24年）8月1日（原則的に季刊）  
ているため、困難かもしれないとの事。月曜日に行なわれる州保健局長、病院長との会談で相談をしてみることにする。州病院精神科の **Borin** 医師は、州病院が医師不足のため専門外では有るが、プノンペンに糖尿病のカンファレンスで出張しており、精神科医が一人となってしまうため、**Sovannara** 先生が途中で退席する。その後昼食となり、センター内で **Savon** さんが作ったカンボジア料理を、**Savry** さん、**Pisal** さん、**Vibol** さん、息子たち2人といただく。トンレサップ湖で取れたエビと、焼き鳥、そしてカンボジアスープそれと3種類のフルーツ、**Savon** さんが、わざわざ1尾、1尾エビを向いて下さって、殻がうずたかく積み上がるまで食べて、満ち足りた。



メンタルヘルスリハビリテーションセンターでの昼食—左から光太郎、**Vibol** さん、**Pisal** さん、**Savon** さん、**Savry** さん、桃太郎

午後1時45分に、プノンペン行きのワゴンで出発。なぜか日の丸のシールが窓に貼っているハイエースで、プノンペンまでの315kmの旅。**Pisal** さんは、「日本の協力で舗装された」と笑顔で言うが、舗装とはいえ、細い道でアップダウンがかなりあるところを最高120km近いハイスピードで、車はもちろん、バイク、牛車、馬車、散歩している牛たち、道の真ん中に居座っている鶏等を巧みなハンドルさばきでかわし次々に追い越すため、身体にこたえる。暴れ馬に乗っている感覚といってよいだろうか。40kmほどは舗装されておらず、激しく上下左右に身体を揺すぶられる。それでも、私がこの活動に関わり始めた10年程前、シェムリアップ市内にはわずか2kmの舗装道路しかなかったのだから、道路の整備は著しい。太陽も暮れかかり、次第に車の数も増えてきた頃、**Pisal** さんが、携帯電話で何やら真剣に話している。翌日10時に予定していたプノンペンでの会議を、保健省の **Sophal** 先生が多忙を理由にキャン

## SUMH ニュースレター第38号

セルしてきたとのこと。わざわざ、はるばる日本から2日かけて、やっとでたどり着く直前に、それも直接メールでアポイントを取っていた、同業の精神科医から約束反故。わき上がる怒りを抑えきれず、「これは **Cambodian style** か」と **Pisal** さんに尋ねた。彼は、苦笑いしながら「**not Cambodian style, but Cambodian government style, they always change a schedule.**」と答えた。その後、**Vibol** さんからも政治や行政への不満が次々と話され、この国の暮らしにくさを垣間みた気がした。**Pisal** さんの懸命の説得で、時間を朝7時30分からに変更して会談は可能となった。シェムリアップを出発して約6時間、喧噪と活気の街 **Phnom Penh** に到着。ドライバーが勧めてくれた中華料理の店で夕食にありつく。行く先々で、私たちをととても暖かく迎えて下さる。ホテルは市内のしゃれたホテル。インテリアも洗練されており、**Phnom Penh** のイメージが大きく変わった。

翌日は、朝6時40分にホテルを出て、保健省に向かう。2002年から2年間かけて養成した6名の **PSR** の一人、**Kamol** が突然の訪問にも関わらず駆けつけてくれた。10年振りの再会だ。**Kamol** は、現在政府の経済財務省の **Liason Officer** をしているが、**PSR** 養成再開の話聞いて、協力のためにわざわざ会議に参加してくれる。息子たちも、初めてカンボジアに来た10年前を思い出して、感慨ひとしおの様子だ。保健省人材開発課の **Keat Phoung** 女史、**Sophal** 先生、**Pisal** さん、**Kamol** さん、**Vibol** さん、そして私の6人で会議が行なわれた。私は、**PSR** 養成の過程を説明し、**PHC** における精神科診療の普及推進の重要性を説明した。しかし、保健省の二人は、精神科医と看護師の専門コースとして **PSR** コースを準備する事を強く進め、それ以外を対象とする事には、意味がないという主張を繰り返したため、話に進展はみられなかった。30分ほどで、保健省を後にして、朝食を一緒にとりながら、**Sophal** 先生、**Pisal** さん、**Kamol** さん、**Vibol** さん、息子たち二人で話をしたが、**Sophal** 先生の見解は変わらなかった。その二つの職種の専門家の養成のために、プノンペンにシェムリアップと同様に、**SUMH** がメンタルヘルスリハビリテーションセンターを建てる必要があること、**PSR** の認証はするが専門家ではないので、**PSR** 養成は意味がないという主張に終止して、彼は食事を終え一人で先に店を出た。

その後、**Kamol** と **Pisal** と話をし、シェムリアップにある大学に心理学科が有るので、そこに講座を開き、可能であれば日本の大学と協力して **PSR** 養成を行なってはどうかという意見が出された。大学の管轄は、保健省ではなく教育省であり、実際の医療

2012（平成24年）8月1日（原則的に季刊）活動は、州の保健局の管轄であるので、州の保健局が許可すれば、PSRがシェムリアップ州で働くことが出来るようになり、シェムリアップ州をカンボジアの精神保健医療のモデル地域にすることが出来るのではないかという。今後、各方面と協議して実現の可能性を含めて、検討して行きたい。



保健省人材開発課にて一左から筆者、Pisalさん、Vibolさん、Sophal先生そしてKeat Phoung女史



プノンペンのレストランで一左からKamolさん、Pisalさん、Sophal先生、Vibolさん、筆者、桃太郎そして光太郎

14日は、Pisalさんの運転で、Vibolさん、息子たちと観光。Phnom Kulenというシェムリアップから車で2時間ほどの距離にある溪谷に連れて行っていただいた。川沿いに木の枝を組み合わせて作ったバンガローが有り、そこで昼食。子どもたちが幼い頃、家族で行った千葉の養老溪谷を彷彿とさせる光景。周囲のバンガローには、家族連れのカンボジア人が輪になって音楽を楽しんだり、鍋を囲んでおり、とてもなつかしい気持ちになる。そして、川では裸の子どもたちが元気にもぐったり、水浴びをしたりしていた。



Phnom Kulenへの道すがら一托鉢する少年僧

16日は最終日であり、午後の出発便に合わせて、朝早くホテルを出て、州保健局に向かう。以前は州病院から歩いて行ける距離にあったが、最近引っ越してしまい、車で飛ばして30分はかかる距離に、広大な敷地に走る片道2車線の道路左右に、行政の建物が理路整然と立ち並ぶ一面にある。最初に保健局長のSarath先生が挨拶されたが、急な会議が入ったため退出され、副局長のBunloeun先生、Angkor Chum病院長のVanny先生、Pisalさん、Vibolさん、そして青木理事と私の6名で会議が行われた。議題は、以下の通りである。

1. Angkor Chum プロジェクトの病院側へのハンドオーバー
2. Angkor Chum プロジェクトに対する病院側の評価
3. 精神科診療の医療収入
4. Krolanh 病院への新規支援について

1. については、現在のプロジェクトが、2013年5月一杯で契約が終了となるため、その後の精神科外来の運営を病院側にお願いした。しかし、一般診療をわずか2名の医師と数名の看護師で行なっており、多いときには100名を越す入院患者をみななければいけず、精神科診療はできないこと。また新たに精神科医や精神科看護師を雇用することも経済的に不可能であり人的にプロジェクトを引き継ぐ事は不可能であるとの事。もし、2013年以降もプロジェクトを継続する場合には、病院側に支払っている使用料を免除するとのことであった。

2. については、Vanny先生は、Angkor Chumプロジェクトを高く評価しており、Bunloeum先生とともにSUMHに深く感謝しているとお話された。

3. については、保険証をもっている患者とそうでない患者がおり、保険証をもっている患者については、収入により全く医療費負担がない方と、月保険

2012（平成24年）8月1日（原則的に季刊）  
会社に\$0.55 支払っている方がいる事を話された。

4. については、Krolanh 病院では、以前 Asravuth 先生が精神科診療をしておられたが、現在そのサービスが休止されており、そのサービスを Siem Reap にいる退職後の二人の精神科医に再開してほしい事、その際、向精神薬の配給は、州政府が行なうとのこと。今後検討する事を約束した。飛行機の出発の時間が迫っていたため、少し名残惜しかったが約 1 時間半で会議を切り上げた。



州保健局にて一左から Pisal さん、副局長の Bunloeun 先生、  
筆者、青木理事、そして Angkor Chum 病院長の Vanny 先生

私にとって2年7ヶ月ぶり、5回目のカンボジア。  
今回は、プノンペン往復と休日の溪谷までの移動を含めると約 900km を車で移動をし、カンボジアの日常生活に直に触れる事が出来た。  
また、カンボジアの保健省の Sophal 先生から保健省の考える目標についてお話を伺うことが出来た。都市部とプノンペンまでの道すがら見続けた農村の光景との乖離、そして Sophal 先生の考える精神医療と私たちが思い描いていた PHC における精神保健の推進との違いに、非常に思い悩んだ。しかし、保健省が進める専門家養成と SUMH が勧めてきた PHC の中における精神保健と PSR の養成、この二つは二律背反するものではなく、両者がより充実する事で、カンボジアの精神保健の将来がより明るいものになるのではないかと、そう考えて、シエムリアップから成田への帰途についた。私たちが進める国際精神保健の意義と目標を改めて問われる旅であった。



ピサルさん家族、Vibol さんと

## II カンボジア映画上映会を終えて

四谷ゆいクリニック  
篠原慶朗

7月1日に開催されたSUMH理事総会後にカンボジア映画上映会を開催しました。今回の映画上映会の準備は、およそ1か月半前からバタバタと慌ただしい感じで始めたため、準備や告知が万全であったとは言えませんでした。しかしながら、理事の皆様からのご支援・ご協力のおかげで無事に実施に至ることができたことに心から感謝しております。

SUMH初となる映画上映会では、若手俳優の向井理さんが主演する「僕たちは世界を変えることができない」（配給元：東映）を上映しました。この映画は日本の大学生がカンボジアに小学校をつくるまでの青春群像を描いた作品で、2011年の秋に公開され話題になりました。

上映会の初めに、青木理事長からカンボジアSUMHの活動10年の軌跡とこれからの展望についてお話をいただきました。カンボジアの歴史や情勢の説明はとても解り易く、カンボジアSUMHの活動報告では今後の展望も語られ、参加された皆様に興味関心を抱いていただけたと思います。映画上映会が始まると、次々に展開していくストーリーに皆が釘付けになっていました。特に、カンボジアの内戦について現地ガイドが語るシーンはカンボジアという国を知らなかった参加者にとってかなりの衝撃だったようです。

映画の上映を終えた後の意見交換会では様々な意見が出されました。例えば、「映画を観て、初めてカンボジアという国のことを知った」、「SUMHの活動報告だけでなく映画上映もセットでやっていくのが良いと思った」、「会員拡大のためにこうしたイベントをもっと実施していくのが良いと思った」、「こ

2012（平成24年）8月1日（原則的に季刊）  
うした上映会を大きなホールを借りて実施し、SUMHの活動を多くの人に知ってもらう機会を作っていくと良いと思った」といったような意見が出されました。また、ある理事からは、映画の中で奮闘する大学生達の葛藤や苦悩、そして時には熱くなって意見をぶつけ合うシーンを、かつてSUMHを立ち上げた当時の自分たちや10年間のカンボジアSUMHの活動と重ね合わせて考えてしまい、映画がとても感慨深いものであったと感想が出されました。映画上映会は初めて参加された皆様のみならずSUMH会員の皆様にとっても様々な気づきを得られた場になったようです。

今回、初の試みで行われた映画上映会でしたが、カンボジアSUMHの活動をより多くの人に知っていただき、SUMHの活動が大きくなってゆくための広報活動の一環として、今後もこのような映画上映会を企画してまいりたいと思っております。今後ともどうぞよろしく願いいたします。

### Ⅲ P S R スタッフ養成に向けて ～カンボジア精神保健史を振り返る～

SUMH監事 高橋智美

青木理事長のご報告にもありますように、現在SUMHではP S Rスタッフ養成に向けての活動を開始しています。P S Rスタッフは心理・社会・リハビリテーション（psycho-social-rehabilitation）スタッフとして、精神科領域の患者さんや家族への支援や地域活動を展開していくのに、鍵となる役割を担っています。

ここで少し、カンボジアの精神保健の歴史を紐解いてみたいと思います。カンボジアにおいて、古くから人々の生活の中で病を癒す存在として重要だったのは伝統治療師と呼ばれる人々です。彼らはクルークメールと呼ばれ、身体的、精神的病いを癒していました。カンボジアに近代医学の精神保健概念が入ってきたのは、フランス植民地時代の始まった1860年代であり、1935年には800床を有する巨大精神病院がプノンペン郊外に建設されていました。しかし、限られた医薬品を使い、日常的な治療として身体拘束を行っており、1970年代には、病床数を大幅に上回る2000人が入院していたと言われていました。1975年からの内戦では知識人を対象として虐殺が行われ、多くの医師や専門家、入院患者も虐殺されたと言われます。内戦後の1979年以降、国内にいた487名の医師はわずか43人、精神科医も亡くなっていました。

文字通り、ゼロからのスタートとなった精神科医

### SUMH ニュースレター第38号

療と人材育成ですが、1990年代前半からノルウェーの医師の支援により精神科人材養成プログラムが計画され、精神科医、精神科看護師の養成が始まりました。4年にわたるプログラムが3回行なわれましたが、精神科医は約30名、精神科看護師は約40名となりましたが、問題点としてはこうした専門職の数自体が少なく、首都プノンペンなどの都会で働くことが多い、また、なかなか地方への普及が広まらないこと、予算上の問題で養成プログラムが継続しがたいことなどが挙げられます。

医師、看護師以外のスタッフ養成については、大学などの教育機関での養成はありませんが、トレーニングが開催されたり、NGOの独自のプログラムで養成していることも多くあります。SUMHにおけるP S Rスタッフは、カナダのブリティッシュコロンビア大学と協力し、今後プログラムを策定していく予定です。精神科領域での専門知識はもちろんのこと、医療だけではなく、リハビリテーションや福祉、専門家としての倫理、またカンボジアという国の地域性や国民性を重視した医療・福祉を展開していくことなど、幅広い分野での知識や考え方を学ぶことが望まれています。人材育成は、今後カンボジア精神科医療の発展には不可欠な要素となります。今後も、P S Rスタッフ養成をSUMH活動の大きな柱として力を入れていきたいと考えております。

### Ⅳ SUMHに参加して

岡 一朗

思い起こせば時の経つのは早いもので既に5年、SUMHの活動に参加させて頂いています。参加当初はカンボジア内戦の後の状況についての関心？！好奇心から拡大理事会への参加、現地スタッフピサル来日時の会食2010年度スタディツアーでの七転八倒（バンコク空港乗り継ぎ不備、体調不良、過度の飲酒等）、何よりもSUMHに参加しなければ出会う事の出来なかった方々との交流は人生における非常に大きな財産になっています。実際、SUMHに参加されている皆様方がご自身の仕事に誠心誠意向き合い、その上で「途上国の精神保健」について貴重なプライベートタイムにおいて真剣に取り組んでいる姿勢と活動内容は、仕事のみの人間になりがちな典型的なジャパニーズビジネスマンの私を自省させて頂きました。

しかし残念な事に「こんな良い活動しているのに何故会員が増えないんだ？」ここ1-2年の悩みになっています。但し、今回の映画上映会に際して篠原さんが大活躍された事に触発されました！

2012（平成24年）8月1日（原則的に季刊）  
スマートな会員勧誘は篠原さん達若手にお任せして  
私は 40 代半ば会社員としての自分自身の形でSUMHへの活動参加を呼びかけて参ります、有体に言えば今までの人脈をフルに活用して仕事と趣味以外に何か社会貢献したいと願っている中高年の方々への啓発活動を開始いたします、精神保健についての知見が乏しいですが一般市民の目線からSUMHを解り易く再度伝えて生きたいと考えています。

\*\*\*\*\*

**編集後記**

この度は皆様方に精魂こめた原稿執筆頂き、心より感謝申し上げます。この度は私の不手際によりニュースレターの発行が遅れてしまいましたこと心よりお詫び申し上げます。活動内容がより一般の方々の心に届く事を願いつつ、何よりも皆様のご健康とお幸せを祈願してご挨拶とさせていただきます。

10

**SUMH Cambodia**

*Actual Address,*

Mental Health Rehabilitation Center,  
in Siem Reap Provincial Hospital,  
Mundol Moi, Siem Reap, Cambodia

*Postal Address:*

P.O.Box 93102 G P O Siem Reap Angkor, Cambodia

\*\*\*\*\*

**SUMH の会員として、また募金によって  
一緒に途上国の精神保健を支えてください。**

**【年会費】**一般 10,000 円 賛助・学生 5,000 円

**【会費・募金の振込先】**

**銀行振り込みの場合**

銀行名;千葉興業銀行 旭支店  
口座名;途上国の精神保健を支えるネットワーク  
理事 青木 勉  
口座番号;普通 1031181

**郵便振替の場合**

加入者名;途上国の精神保健を支えるネットワーク  
口座番号;00170-2-535294

郵便振替は振替用紙に、住所・氏名・Tel & Fax・E-mail・  
会費と募金のいずれか・SUMH へ一言を明記の上、お  
振り込み下さい。

\*\*\*\*\*

**SUMH日本事務局**

〒130-0013 東京都墨田区錦糸3-5-1

錦糸町北口ビル

TEL 03-3812-0736

HP; <http://sumh.hp.infoseek.co.jp/>

\*\*\*\*\*

ご寄付のお願いです  
「年賀状等の、書き損じはがきを寄付して下さい」  
皆様が年末作成した際の、年賀状等の書き損じはがきを寄付お願いします。支援活動に有効活用させていただきます